



特攻隊が出撃した知覧飛行場

振武特別攻撃隊長 5～突入、戦死～

片岡喜作中尉(中学 33 回)を隊長とする第 81 振武特別攻撃隊は 4 月 20 日、小月飛行場から知覧基地に進出、4 月 22 日、第 4 次航空総攻撃の命令が下され、午後 3 時 18 分、知覧基地を出撃、祖国の安泰と繁栄を願って片岡隊長以下 10 機は、沖縄本島名護湾にあった海上敵艦船群に突入し戦死されました。(なお、陸軍少年飛行兵 10 期生・橋本栄亮軍曹はエンジン不調により途中で引き返し、4 月 26 日単独出撃突入戦死されました)。本紙では戦後 70 年の昨年(2019)から戦争に関わった先輩方の足跡を追っています。

遺書

小月基地にて、「4 月 22 日知覧基地から出撃せよ」との命令を受けると、片岡隊長は両親と重子夫人に「待望の時機来たりて 本日〇〇(機密保持のため特攻の 2 文字が伏せ字になっています)下命愛機を操って勇躍 制空の途につかんとす 兄と共に故郷の名を辱めざらん事を期す 委細後報 不備(文意が十分でないという意で、手紙文の最後に添える語)との一報をまず送り、第 81 振武隊の 12 名は 4 月 20 日知覧基地に進出して行きました。「振武隊指導及出撃準備要領」によれば、「振武隊ノ當(知覧)飛行場到着ハ出撃前々日夕刻迄トス」とされており、それに従っての小月基地出発でした。その日の朝、片岡隊長は奥様、子供たち、両親への遺書をしたため、奥様と両親のもとへ送っています。

〇奥様への遺書

重子様

神機到来し只今発進します。

別紙名簿(遺品中にある)の隊員より心から心服せられ肉親以上の情けに守られて征きます。また当山口県小月飛行場に於て約 10 日間待機、附近の村民各位より誠心のもてなしを受け本場に幸福に征きます。その状況は宿舎附近に居られる豊島とし子様、桜井朝子様、西山の奥様等より貴女にお知らせ下さる筈です。皆な敢然として総てを私達の為に世話を下されました。貴女様からお礼を申し述べて下さい。

なお士官学校同期の船木中尉殿も当

地にあり不眠不休でお世話下さいました。

貴女様には何も夫らしきことを為し得ざりしもお許し下さい。

私は幸福に征きます。体を大切に末永く子供と共に暮らされる様お祈り致します。

私の散華後、軍との交渉に於いて不明の点あらば、埼玉県大里郡三尻村東部五四〇部隊に連絡せられ度し。

御両親に孝養をつくしつゝ子供をお願い致します。

四月二十日 九時

指揮所にて

〇子供たちへの遺書

三枝子

礼子

生まれ出づる子

お父様は大君の為、特攻隊長として敵艦に飛行機と共に衝突命中米英共を討ち滅ぼします。

幼少にして父と別れますがお母様は本当によい母でありお父様と同じ心なのだからよくお母様のお教えを守り良い子になるんですよ。病気をせずにお父様は幸福の裡にお前達と別れます。

さようなら

〇両親への遺書

お父様

お母様

喜作

長い間我儘を申し 何等子としての義務を果し得ずして去ること 何卒お許し下さい あと一時間にて当基地を立

ちます 然し 喜作は良き部下を頂き且つ 世の人から誠心からのお世話を受け 幸福の裡に 敵艦に人機 命中し去りゆきます 必ず大物を轟沈し御恩に報ゆる覚悟です

一、昨四月十九日 最後の座談会にて 録音を取り 近く 放送せらる、由なれば お聞き下さい 又 小倉放送局より 音盤をお送り下さる筈です

一、当地にての遺品は 当部隊にて 発送してくれます

両親への遺書



神機到来、人機命中

4 月 22 日、第 6 航空軍による第 4 次航空総攻撃が実行され、知覧基地からの突入機は「第 79 振武隊 1 機」・「第 80 振武隊 11 機」・「第 81 振武隊(片岡隊長) 11 機」の 99 式高等練習機及び「第 105 振武隊 6 機」・「第 109 振武隊 4 機」の 97 式戦闘機でした。33 機の特攻機群は午後 2 時以降、逐次知覧基地を出撃し、66 戦隊の 99 式襲撃機 1 機に誘導されて奄美群島西

方を前進。空中援護は55戦隊、59戦隊の3式戦闘機飛燕18機が喜界島まで、それ以南は100飛行団が担当し4式戦闘機疾風21機で援護しました。

特攻機群は夕刻、日没直前、沖繩に到着、低空から敵艦に接近し、全隊攻撃突入が認められました。突入時刻は夕刻5時半から7時半、上陸支援艇LCS15号と掃海艇スワローを撃沈、駆逐艦ハドソン、ワズワース、イツシャーウッド、敷設艦シアール、掃海艇ラムソン、グラジエーターの計6隻を損傷させました。

この出撃を知覧基地で見送ったのが部下の大関馨氏。大関氏は整備兵として81振武隊に知覧まで同行しましたが、原隊へ帰隊後、奥様への書簡(知覧特攻平和会館蔵)の中で出撃の様子を次のように記しています。

「中尉殿にはこの度振武特別攻撃隊長として、四月二十二日十五時十八分〇〇(知覧)基地出発致され、永久の大義に生くとの言葉にて元氣にて征途に向かはれました。基地にて最後の遺品として小兵持参致し、本日小包にて御送り申し上げます。ご承知下さいまし。

中尉殿、生前は色々ご心配に相成り、この度の出撃にもお供を致し前進基地にてお別れ致した次第であります。小兵征務違いで一人原隊に帰りたるは誠に残念にて、なんとお話し申し上げてよいやら、唯言葉の先に立つは涙のみ。奥様におかせられてもさぞお歎の御事と存じます。ご心中容としてお察し申し上げます。昨日迄は隊長殿としてお慕い致しながら之れが永久のお別れになるうとは、全く夢ではないかと出撃後の夕空の下、飛行場で唯一人南の空をながめ居

りました。ああ隊長殿は大義に生くるとのお言葉を残して征かれました。

奥様におかれましては、お子様たちとともに、恙なくお暮らしあらん事を祈り申し上げます。色々御通知申し上げたく思い居りますれど、感極まれば先に吾が涙のみ、お許し下さいませ。乱筆を謝じ御通知並びにお悔みまで。敬白

大関馨

片岡重子 様



知覧特攻平和会館に復元された、三角兵舎とその内部



この片岡隊長の戦死の報を、派遣されていた台湾で知ったのが、館林教育隊時代の教え子であった土田直鎮氏(つとねのり)が第3期特別操縦見習士官・東京大学国史学科卒・東大教授・東大史料編纂所所長・国立歴史民俗博物館館長・日本古代史。平成5年歿)。土田氏は片岡隊長の特攻による散華について「軍隊全期を通じて、新聞など見る機会にはほとんどなかったが、後に台湾に行

ってから、偶然ある小学校の教室にあった一枚の新聞を見て、私はこの片岡中尉が沖繩に突入したことを知った。新聞には中尉が、『教え子がたくさん先に行っているから、会うのが楽しみですよ』と言って嬉しそうに飛び立ったと書いてあったが、我々この教官に習った者として、それが記者の作文ではなく、片岡中尉が念願かなって、本当に喜んで突っ込んだことを絶対に確信する。中尉については教育隊の教官としてのことしか知らず、他に、すでに妻子があり、夫人は館林一の美人であったとも聞くが、この教官の印象は私には終生忘れがたいものになるう。」と記しています(東大十八史会編『学徒出陣の記録』あるグループの戦争体験 中公新書 1968(昭和43)年刊行)。

4月22日、奇しくも母校土浦中学の創立記念日に片岡隊長は出撃、戦死されました(戦死後、少佐に昇進)。その35日目に、ご長男が誕生しました。

感謝の供養

館林駅で片岡中尉を見送った奥(旧姓関口)純子さんは戦後、孫の針ヶ谷穂高氏(我孫子市在住)に「私が敗戦のショックや戦後の混乱期を乗り越えて、生きてこられたのは片岡中尉のお蔭です。館林駅で頂いた片岡中尉の言葉がどれだけ私を勇気づけ、励ましてくれたか分かりません。片岡中尉は命の恩人です。」と語ってこられました。幼少から純子さんのお宅を訪れるたびに、片岡中尉の人となりや聞かされてきた針ヶ谷氏は、成人されると片岡中尉の眠る館林市の五宝寺やつくば市玉取の実家を訪れ、供養

の誠を捧げてこられました。さらに知覧特攻平和会館に純子様とともに片岡中尉供養のための灯籠を献灯し、片岡中尉が突入戦死された沖繩名護湾も訪れ、供養の香華を手向けられました。現在でも片岡中尉に関する資料を入手されると、実家を訪れ、片岡中尉の霊前に供えられています。



平成26年4月、奥順子・針ヶ谷穂高の両氏が片岡忠作中尉の供養のために建立された石灯籠。(石灯籠は、知覧基地をはじめ各基地から出撃散華された1,036柱の陸軍特別攻撃隊の英霊を顕彰し、永遠のご冥福をお祈りするために建立されています。)

(高21回 松井泰寿)

旧本館改修工事が間もなく始まることに伴い、旧正門が使用できなくなることから、仮設の通用門が同窓会館横に設けられます。また、旧本館内に展示されていた物品は、昨年中に校内各所に格納されましたので、現在の旧本館内部には何もない状態です。建設当時を知るためには絶対の機会ですので、過日、現一・二年生対象とした見学会を実施しました。